女王騎士物語の世界で生きる

千変万化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女王騎士物語の世界で生きる

【Ｎコード】

Ｎ１４９３Ｙ

【作者名】

千変万化

【あらすじ】

目が覚めると赤ん坊、平凡な日常を過ごしていた主人公が一から人生をリスタート。いわゆる転生というものを経験してしまったようです。せっかくだから楽しむことにします。この世界でどんな物語を描いていくことやら？ご覧ください。

プロローグ（前書き）

この小説は二次小説、転生、オリジナル設定を含み、
原作破壊等を含みますのでご注意ください。
そういうのがダメな人は、お帰りいただいた方がよろしいと思います。
また、批判、酷評をされる方もお帰り下さい。
それ以外の方は歓迎します。楽しめるかどうか分かりませんが、お楽しみください。

プロローグ

世の中そうそう変わるもんじゃない。政治家は碌なことをせず、
税金上がって給料下がる。
泣ける世の中になったもんだ。
心から喜べる時間は趣味や食事、睡眠（布団の中）ぐらいだろうか。

でも、そんな世の中や自分にどこか満足してる部分もあるにはある、
住めば都とはよく言ったものだと思う。
趣味ができる時間があるだけ幸せと思うべきか。
そんなことを漫然と感じながら、仕事帰りに夕飯を買いにコンビニへと足を運ぶ。

お？初めて見る弁当だ。これにしよう。
そして、早く帰ってゲームしよう。
明日への英気を養うために。

そんな平々凡々な日常が続くもんだと思っていた。

ふと目が覚めると、知らない天井だった。

「（あれ？ここどこだ？）あぅ？　あぅあ～？」

ん？まともに喋れない！？
というか、身体も思い道理に動かない・・・。

「男の子、でかした！これで我が家も安泰だ！！」

「えぇ、わたくしも嬉しいですわ～。あなた、名前はどうなさいますか～？」

うん、ちょっと落ち着いて整理してみよう。

周りに知らない男女、知らない天井、喋れない動けない現状。

・・・・！！

赤ちゃんになってる！！

いわゆる転生てことなのか！？

「トンヌラというのはどうだ」

うん、そんな某大作ＲＰＧでつけられるような名前は嫌だ。

「その名前もいいですが、ローラントというのはいかがですか～？」

トンヌラと比べるなら断然こちらの方がいいに決まっている。

賛同しておこうか？

賛同する？しない？

↓Ｙｅｓ　ｏｒ　Ｎｏ

Ｙｅｓだ。よく分からん現状だが、自分の名前なら納得のいく方がいい。

「ローラント、ロランか悪くないが、やはりトンヌ「おぎゃー！！」

・・・ローラント「あぃ！」・・・トンｎ「みぎゃー！！」ローラｎ「あぃ！」

（無念だ。何がいけないのか、いい名前だと思ったのだが。）

・・・よし、今日からお前の名前はローラント、

ローラント＝アウスバッハだ！！」

無事トンヌラという名前を回避できたようです。
状況の把握も大変だけど、うん、
今日はもう寝よう、寝て目が覚めると、いつも道理の生活に戻っていると信じて。
というか、この身体赤ちゃんのためか眠いんだ。飯より睡眠の気分だよ。

お休みなさい。

プロローグ（後書き）

かなり短いですが、一区切りとします。
なお、更新は遅いレベルになるかと思います。
完結はさせるつもりなので宜しくお願いします。

第一話　0歳から3歳だよ（前書き）

年齢とか、はっきりとは語られていないけど、ある程度の予測からすると１６歳とみています。Ｄ●３みたく。エルトの幼年時代の年齢予測と7年後を加味すると、一番しっくりきます。気にしないように。

あと、口調が変わっていくのは精神が肉体の年齢に引っ張られているためです。

第一話　０歳から3歳だよ

あれからさらに数日が経過しました。

ども、転生？生まれ変わり？を果たしたローラント＝アウスバッハです。

ロランと呼ばれています。０歳児です。

数日間、時間をかけて考察した結果からいうと、

１・間違いなく、現状は赤ん坊

２・前世の知識あり、但し前世の名前など思い出せない点も存在する

３・言葉はなぜか理解できる

４・自分は侯爵家の一人息子らしい

５・女王がいる国とのこと、現在の女王は即位１年目とのこと

６・？？？

両親や侍女の会話で判明しました。

うん、数日経ちました。身体は赤ちゃん、心は大人です。どこぞの名探偵ですね。

俺、いや私は男いや漢です！！！
母さん、美人です！！何がとは申しませんが、恥ずかしいがそれ以上に嬉しかったと言っておきます。
母さん、いや母上は大層なものをお持ちしていました。父上ナイスと言っておきます。
というか、父上も何気にイケメンのようで、将来は期待がもてそうです。

この数日間で祖父、祖母達の偉大さなど、侯爵家の役目なども聞かされました。赤ん坊に語りかけるようにおっしゃってくれましたさ。
まぁ、家の人達はこちらが会話を理解してるとは思ってないだろうけど。
ここで、重要だったのは、祖父、祖母達が元女王騎士（クイーンナイト）だったということ。
女王騎士（クイーンナイト）、聞き覚えがあります。これ聞いた時は、頭が真っ白になりました。

うん、昔少年ガ●ガンで掲載されていた、女王騎士物語のようですね。
生まれ変わっただけかも、と思ったけど、漫画の世界に転生したようです。
中世ヨーロッパ風ファンタジー、好きな作風でした。
劇的な最終話だった気がします。
そう、気がするのです。
思い出せない！！
キャラの人間性とかは覚えていても、ストーリー部分、根幹が思い出せないなんて！！
最低限の知識しか思い出せないとは、不完全な転生のようです。

いや、よく似た世界ということも在りうるので、断定はしたくな

いところではありますが。
どちらにせよ、せめて身体がバグキャラであってほしい、今日この頃です。

つまり6は、今いる世界が半確定、但し原作知識は微妙、ということです。

前世の最後の記憶については、え～と、コンビニに行って、その帰りに確か誰かにぶつかって・・・、
うん、通り魔に無差別に殺されたか、恨まれて殺されたのか、
前者の方が個人的にはいいな（世間体的に）、まぁどっちも結果は変わらないけど。

うん、過ぎたことを言っても仕方ない。前世の名前も何故か思い出せないので、ロランとしてこの世界を生きることにします。むしろ、せっかくなので今の世界を楽しみたいところです。

ポジティブに行こうかと思います。

今、自分がいるのはアルシリア王国という国で、
このアルシリア王国は周りを大国に囲まれた小国だが、代々聡明な女王によって統治し、
女王騎士団をはじめとする騎士団によって王国を統治、
人々が野盗や魔物に怯えて暮らす世にあって、アルシリア王国はその平和を保っている、とのこと。

確定！！この話を侍女に聞いた時に確定。女王騎士物語の世界のよ

うです。
うん、八つ当たりとして、美人の母上から生きる糧をたっぷり貰うことにします。

ちなみに、北東にエルムガンド公国、東側にギスカーン帝国、北西にワールーク帝国、
西および南西にマクノイス魔法皇国、南側は海に面しており、
ヤパーナ国という島国も南南東辺りにあり、いろんな国に狙われるの位置取りです。
いずれも国土広いです。大国です。それぞれ独自の騎士団や文化があります。
こういうのは何故かしっかり思い出せます。人物像や余計な点はしっかり分かります。
でも、ストーリーは思い出せない・・・！！。

まぁ、現状ほとんど何もできないので、限界まで動いて寝て、食べる、いや飲む？、排泄を繰り返し、
身体の成長を促したいところです。
あと、休憩中などはマナを感じ取ることを試みています。

　そう、この世界はマナと呼ばれる力が存在してるんです。人が持つ心の力、
精神エネルギーをマナと広義し、強い意志や精神力がマナの源とされています。
また、大気や自然の中にも大地や風、炎といったマナが存在します。
まぁ、他の世界？でいう魔力やチャクラ、オーラみたいなものと思ってほしい。

これを感じ取り行使することが当面の暇つぶし兼修行となると思います。

身体は今は特に何かできるわけではないし。

「あぅあ～（腹減った～）」

「あら～、ロランちゃん、お腹がすいたのかしら～？「あぃ！」
じゃあ、ちょっと待ってねぇ～・・・」

はぁ～い、とのことで飲みます、寝ます。動いては疲れ、マナを感じ取る練習をする。

こんな感じで生まれたての頃を過ごしましたとさ。

■

3年経過しました。

3年かけて変わったことや分かったことについて、まずは説明を。

というか、うん、授乳時とか返事していたので、聞き分けのいい子とか、
あまり泣かず、聡明な子とか、早い段階で喋ったり、歩き出したりしたので、今では、神童扱いです。

「さすが我が子だ！」　とか

「さすが我が孫！！」　とか、
「ん～～、ロランちゃ～ん可愛い～」　などなど、褒められる、煽てられる。
うん、心が子供ならダメになりそうなぐらいです。
ちなみに言語も英字のようで、読み書きができる点が輪をかけているようです。

次に、両親について。

父上の名前はウィリアム＝アウスバッハ、母上がミューズ＝アウスバッハ　といいます。
父上や母上は女王騎士（クイーンナイト）ではなく、父上は王国騎士団の一般騎士予備役、
母上は元王国参謀部作戦部だったそうです。現在母上は主婦？なのか、常に家にいてくれています。
　それらの部門は、女王騎士（クイーンナイト）になれなっかた人や事情のある人、
その部門の才能があるもので構成されているそうです。
父上は、アウスバッハ領の内政をしっかりしたいのを理由に、
女王騎士（クイーンナイツ）団の試験自体参加していないとのこと。
小国の貴族といってもそれなりに土地を保有し経営させているようです。
母上は作戦立案の才能が理由らしいです。
うん、母上を少し疑ってしまってる自分がいます。
ちなみに、母上は出産を機に辞めたとのことです。

祖父たちについて。

父方の祖父祖母の方が、祖父がヘンリー＝アウスバッハ、祖母はエレン＝アウスバッハ
母方の祖父祖母が、祖父がアーランド＝ロアーヌ、祖母がミリー＝ロアーヌといいます。

ロアーヌ領も父上が経営してるとのこと、母上は一人娘だったらしい、いろいろ揉めたとか。
ロアーヌ、アウスバッハは隣接しているので、昔から関係は深いみたい。

ヘンリー、アラン爺ちゃんとエレン婆ちゃんが元女王騎士（クイーンナイト）だったそうです。
でも、ミリー婆ちゃんが一番強いとのこと。
　なんでも、潜在マナ量は凄まじかったが、マナの発現が若いときは下手だったらしく、
当時の試験に受からなかったとのことです。
で、潜在マナおよびマナの総量が多いためか、見た目は１０代後半ぐらいに見えます。サイ●人かよ！
見た目が婆ちゃんじゃないです、姉さんですね。姉さん、事件です。
（ネタが分からなければ後免ね！）

　女王騎士（クイーンナイツ）団の試験は、１５歳から２０歳迄の間で１度しか受験できないとのことで、
５年に１度試験が行われるそうです。５年違うとだいぶ違う気がするのはなんでかな？
ちなみに、マナの成長は２０歳ぐらい迄しか伸びしろが良くないのが理由らしいです。
やっぱり、１５歳の時に試験と、１９歳では結構変わる気がする。
女王騎士（クイーンナイト）はアルシリア王国のなりたい職業毎年だんとつ？１らしい

です。
他には、ヘンリー爺さんはマナのコントロールがとても上手いらしいです。

隠居している、祖父や祖母達はよく顔を見せに来ます。可愛がられてる反面、
（特に）祖父達はクイーンナイトにする気満々です。
騎士聖典関係の本を大量にそれとなく置いていきます。（初めは絵本だった。）

うん、ある程度の歳になったら、扱かれそうです。まぁ、強くなれるのは望むところですが。

次に、この国の爵位について。

女王や王女を頂点として、六大公爵家が存在し、侯爵、伯爵と続いていくようです。
ちなみに六大公爵家の方々は、この国の看板騎士団の女王騎士団（クイーンナイツ）を纏める団長だったり、
王国騎士団を纏める将軍だったり、王国参謀部の参謀長だったりします。
エリート中のエリート、各部隊のお偉いさんですね。

うん、地味に我が家は上流貴族のようです。

それと、自分の容姿について。

銀髪のようです。顔は整っていてカッコいい系になるみたいです。

母上たち曰くですが。

そうそうマナですが感知するどころか、3歳今現在、発現できるようになりました。
感知の方は毎日心掛けていたからか、1歳の時ふと感じ取れるようになった。
運動量もかなり増えました。うん、身体の方はチートかもしれないと思います。
1歳でマナを感知し、3歳でマナの発現ができるとか有り得ません。
この世界では。

まだ小さいからか、貴族だからか神童扱いといえど風呂は一人では入らせてくれません。
母上や侍女が必ずご一緒します。ありがたく、目の保養を・・・、ということで、
風呂場で母上と入ってます。水が邪魔です。しっかり見たいと思います。
身体を洗っている時とは別に見たいんです。マナを発現すれば水を吹き飛ばしたり、
風を起こせたり、肉体強化できたりできるとアラン爺ちゃんが言ってましたし、
そんな記憶もあります。という訳で、何事もチャレンジです。

―ドッパーン―

水が弾けました。

コマンド

謝る
泣きつく
とぼける
↓ じっくり観察する

心は男（漢）です！まだ、小さいので許されると思います。母上ですし。
あ、母上は無事だよ、無傷だよ。まぁ、余すとこなく見ましたが！
「ロランちゃ～ん、水無くなっちゃた～」

うん、母上天然です。物凄く眼福ですが、
・・・うん、ミリー婆ちゃんも一緒に入ってた。見た目は姉ちゃんだけど。眼福です。
・・・・、今のでマナの発現についてばれたかな？
気づかなかった。ステルス機能搭載？気配を消していたと見るべきです。
もしかしてミスった？早まった？ピンチ？
姉さん、ピンチです！姉さんいないけど…

うん、次話へと続きます。

第一話　0歳から3歳だよ（後書き）

次話で多少人物設定が分かると思います。
うん、～～～は口癖みたいなもんです。
第〇話より原作みたいに章にした方がよかったかも…。

次話予告も原作みたいにはっちゃけてもいいのかな？

第二話　前門のボス、後門の天国は孔明の罠だった（前書き）

大まかなストーリー自体は壊さず、原作の雰囲気を保てるように心掛けています。
多少違った意味で原作破壊を行うこともあります。
とりあえず、原作のメンバーは６歳くらいから登場いたします。
全体の大体の骨組みはできました。
まぁ、楽しんでいただけたら幸いです。

第二話　前門のボス、後門の天国は孔明の罠だった

緊急コマンドだ！！

逃げ出す
戦って記憶を失わせる
知らないふりで徹底する
婆ちゃんに抱きついて誤魔化す
泣いて誤魔化す
婆ちゃんの貧乳について質問する
婆ちゃんの胸を弄(いじ)くる
如意棒、出番だぜ
ルパンダイブ（すでに裸だが）
話題の転換を試みる

コマンド多いな。いくつか、即死コマンドがある気がするし。
3歳で最強相手に戦いを挑むのは無謀だと思います。
お胸関係は即死する気配が濃厚です。
ん～～、器用に泣けるか？
否、見破られそうです。
逃げ出す？

高確率でまわりこまれたと表示されそうです。ボスからは逃げられないと相場は決まっています。

ならばこれだ

↓　婆ちゃんの胸を…

って勇者か！！！

それはやばいです。

無理！無駄！無謀！

まだ死にたくないです。

思考するのにもそろそろ真面目に選んで動かねば。

これだ！！

↓　婆ちゃんに抱きついて誤魔化す

「あ、ミリー婆ちゃんだ～～。お婆ちゃ～ん。うわぁ～お肌すべす

べだね～」

いけるか？

「ミリーお姉さんと呼ぶようにの」

そこか？そこに反応するのか？だが、いける。

「ミリーお姉ちゃんて母上の母上なんでしょ？なんでそんなに綺麗なの？」

「ママは～。ママはどぉお～」

母上という名のクリーチャー参戦です。

「母上も美人だよ。僕幸せ～」

「ありがとうロランちゃ～ん。可愛いわ～、大好き～」

背中が気持ちいい。ＧＪ俺！！

「ミューズ。とりあえず侍女に湯を再度張らせるが良い」

「はぁ～い」

―チリーン―

ミリー婆ちゃん、じゃなくてミリー姉ちゃんが居たことはスルーですか、そうですか。

ベルを鳴らして侍女を呼ぶ母上。

「ところでロランや、今のはお前じゃの？マナを発現させたのじゃな？」

スルーできなかった。ｏｒｚ

「な、何のこと？」

「惚けなくともよいわ。内に秘めたるマナを精神力で一気に解放する、つまりマナを放出しなければ、
水を弾くなど今のお前の筋力（ちから）では無理じゃよ。
そうか、その年でマナの発現ができるのか。そうか、そうか」

ふふふと笑っています。いやな予感が止まりません。

「い、今、初めて出来たの！」
「そうか、初めてか。さすがわらわたちの孫じゃ。アランも喜ぶのぉ」

こっちはＮｏ～です。

・　・　・

新しく湯が張られました。ちょっとしたエロ心が人生を左右しそうな状況です。

うん、なるようになれと思おう。話を変えよう。

「ミリーお姉ちゃん、アラン爺ちゃんとヘンリー爺ちゃんってどっ

ちが強いの？」
「ふむ、一概には言えん質問じゃの。
素の実力はほぼ互角じゃの。長期戦になればヘンリー、短期決戦ならばアランの方に分があるのぉ」
「何で？」
「母様ばかり構ってもらってずる～い」

母上ってムスコン？

「お前はずっと一緒に居るじゃろうが。
ふむ、知ってのとおりヘンリーはマナの扱いがとても上手い。
それはつまり体力のペース配分にも繋がる。相手の攻撃を即時に見抜き最低限のマナで防御したり、
最低限の動きで相手を躱す。長期戦になればその差は大きなものとなる。ヘンリーはそれに長けておる。
　対して、アランはヘンリーと比べマナの扱いは上手いとはいえん、
女王騎士（クイーンナイト）のレベルで見ると普通じゃ。
だが、マナの総量はわらわほどではないが、女王騎士（クイーンナイツ）団の中でも上位だったのでのぉ。
マナの総量が多いということは、一撃に込めるマナを多くできるということじゃ。
また、マナが多いということは大技の連発も可能にする。長期戦になると不利だとわかっているなら、
大技でたたみ込む戦法を取れば良いということじゃ」

「でも、それだとアランお爺ちゃんの方が強いんじゃ？」
「ロランちゃ～ん」

ふにふにと母上にほっぺたを弄れてます。密着して柔らかいです。

「例えばじゃが、１００のマナを使用する技を１００のマナで使用出来る者と、
１５０使わなければ発動できぬ者とでは、１００のマナで使用できる方がマナを温存できる。
いくらマナの総量が多いとはいえ、疲弊するのが早かっては長くは戦えなくなる。
つまり前者は最低限のマナを使用し、相手の攻撃を躱したり、いなしたりするだけで絶対的有利な状況を作り出せるのじゃ。
１００の技を１５０の威力で繰り出すには、
１５０のマナを使わなければ発動できぬ者は
より多くのマナを消費しなければならんということなのじゃ」

「つまりヘンリー爺ちゃんは、躱したり、いなしたりして最低限のマナで大技を防げて、
アランお爺ちゃんは、防がれないように、より大きな攻撃や躱されづらい攻撃をしなくちゃいけないんだね。うにゅ」

「うむ、そうじゃロランは聡明じゃのぉ。
…ミューズ引っ張りすぎるでないぞ」
「そんなことして～ま～せ～ん」

いえいえ、絶賛ふにふに中です。

「さて、わらわは先に上がるぞ、やることもあるでな。のぼせんようにの」

なんだろう、自分に関係してる気がする。
まぁ、今さらどうしようもない。諦めよう。
絶対正義～♪と母上が歌っている。
まぁ、うん、考えて行動すべきかもね。

その後、母上に抱き締められながら、風呂を楽しんだ。

〜　Ｓｉｄｅ　ミリー　〜

面白い、予想以上にあやつは面白い。

気配を消してここ数日見ていた甲斐があったというものじゃ。

神童か、そう言われるのも無理はない。読み書き程度ではどうかと思っとたが、さすがにこれはのぅ。

わらわがマナの発現を行うのには、数年かかった。

満足に行使できる頃には２０をとうに超えておったわ。

我が孫ながら実に良い。

見たところ、マナの総量や潜在能力も高い。

鍛えればわらわを軽く超える可能性がある。

新しい楽しみができたものだ。

うむ、善は急げじゃ。

アランやヘンリー、エレンにも手伝わすかの。
夫達は喜んで手伝いそうだのぉ。
笑いが止まらぬのぉ。楽しみ、楽しみじゃ。

〜 Side out 〜

◆

―バタンッ!!―

「アーランド!!アーランドはどこじゃ!」

「ん?どうかしたのか、ミリー。ミューズのとこに行っていたのではないのか?
そんなに慌てて…何かあったのか?」
「あったとも!!とても楽しいことがの。アラン手伝え!!」
なんだ?嬉しそうに、手伝え?訳が分からん…。

・
・
・

「さすが我が孫!天才だな!いいぞ、我らで立派な女王騎士(クイーンナイト)にしようぞ」
「あぁ。ヘンリーやエレンにも手伝わせるぞ。やるからには徹底的

にじゃ」

「ふん、まぁその方がより孫のためか、いいだろう、奴らにも手伝わすか」

「よし、早速エレン達のところへ行くぞ！」

我が嫁ながら行動が早い。
まるで新しいおもちゃを見つけた子供のようだ。
そこが可愛いのだが。今からだと到着するのは夜中だがまぁいいか。

◆

「ヘンリー、ヘンリー達を呼べ」
「ですが、旦那様や奥方様はもうお休みになられていて…。」
「いいから、アランが来たと伝えて叩き起こせ」
「わ、分かりました。少々お待ちくださいませ」

ヘンリーの執事達が下がる。
夜中だから寝てるは仕方ないな。
ま、エレン殿には悪いが勘弁してもらおうか。

「早く来んかのぉ、眠くなってしまうわ」

そうだな、ついでに今日はここに泊めてもらおうか。

・・・

「アランにミリーさん、こんな時間に何の用だ！？儂(わし)らは寝ていたんだぞ。」
「まぁまぁ、あなた落ち着いてアーランドさん達の話を聞いてみましょう？」
「いや、しかしだな」
「「しかしもかかしもない。いいから聞け！」」
息ぴったりだな。いったいなんだというのか。
変な用だったら儂はアランを殴る。

■

「…その話は本当か？」
「わらわが確認した。間違いない」
ミリーさんが実際に見たか…。うぅむ、3歳でローランドがマナを使用したか。
早すぎやしないか？そりゃぁ、女王騎士(クイーンナイト)にはなってほしいと儂も思っとたが。

「あらあら、凄いわねぇローランちゃん」
「そうだな、さすが儂の孫といったとこか」
「俺の孫だからだ！」「なんだと！」
「やめんか！！
でどうする手伝うてくれるかの？」
二人だけに任せるのは不安だし、仕方ないな。
なにより可愛い孫(ローランド)のためか。
「いいぞ、協力しよう。エレンはどうする？」

「私もお手伝いします。ロランちゃんのためですから。
そうですねぇ、それぞれ担当を決めて、教えてみるのはどうかしら？」

「それぞれの得意分野を教えるということか、エレンさん」

「えぇ、その方が無駄が少ないし、ロランちゃんも分かり易いでしょう」

確かにその方が効率的だな。

「ふむ、ならばアランが基礎トレーニングと格闘術、ヘンリーがマナのコントロール、
エレンが戦闘戦術及び剣術指南、わらわがマナの総量向上やその他応用全般を教えるのはどうじゃ」

「えぇ、そんな感じで。でも、まだ3歳だからいきなり無茶なことをさせちゃダメよ、ミリー」

「わらわとてそんなことは、分かっておるわ。（まぁ妥協はせんがのぉ♪）」

なんか間があった気がするが…。

決定か、細かい事は明日にしてほしいな。

「よし、だいたい決定だな、詳しくは明日だ。それとヘンリー今日は泊めてもらうぞ」

「客間を使うと良い。ところでウィリアムやミューズちゃんはこの事を知っているのか？」

「ウィルは知らんじゃろう。ミューズは気づいておる」

まぁ、あの頭脳で、生まれてからほぼべったりだからな、ミューズちゃんは。分かって当然か。

「まぁ、些細なことは明日朝一にじゃ。午前中にはミューズに話をつけたいでの、楽しみじゃ！」

相変わらず、行動が早いなミリーさんは。

明日からか、確かに楽しいかもしれないな。

可愛い孫強化計画（ローランド）スタートといったところか。

◆・・・

翌朝、昨日帰ったはずのミリーお姉ちゃんとアレン爺ちゃん達が4人揃ってやって来ました。

いやな予感的中ですか？

真実はいつも一つ。名探偵コ●ン

「喜べロラン、今日からわらわ達４人が立派な女王騎士（クイーンナイト）になれるよう鍛えてやろうぞ」

うん、ミリー婆（ねえ）ちゃんはノンストップのようです。

次話へ続くよ

第二話　前門のボス、後門の天国は孔明の罠だった（後書き）

ミリーに対する禁句は　貧乳、ババアです。
父親が空気ですね。そのうち、なんとかします。
ヴァレリーの魔黒装（ダーク・ギア）の名前ですが、
２つ３つ候補がありますが決まらない…。
まぁ、ダークギアが出てくるのは９～１０歳以降ですけど。
原作で名前のない六大聖騎装（グラン・エンチャントギア）はほぼ決定です。
違和感はたぶん少ないと思います。
まぁ、これもまだまだ出てきませんが。
原作始まるまでが長いので、許してください。

第三話　レベルアップ開始（前書き）

多少削って控えめにしています。
若い頃に筋肉をつけすぎると成長の妨げになるのですが、
そこはファンタジーです。

第三話　レベルアップ開始

～前回までのあらすじ～

ローランド＝アウスバッハ、通称ロランです。どうぞよろしくお願いします。
どうやら自分は突如転生し、女王騎士物語の世界に生まれ変わったようです。
ある程度の知識はあるが、肝心な点は思い出せなかった。
だから、前向きに気にしないことにしたんだ。
　現在3歳になった。自分はアルシリア王国の侯爵家嫡男のようだ。
なんとなくだが自分が子供であることの違和感がなくなっている気はするけど、
それでもエロ心は男であるからには仕方ないと思う。
1歳の時から、マナの感知はできるようになっていたんだけど、3歳の現在、
美人の母上と一緒にお風呂に入っている時に、エロ心からマナを発現することに成功したみたいだ。
まぁ、心のどこかで母上ならバレないかなと思っていたんだけど、
最強って言われてるミリー婆ちゃんがその場に居たんだ。
その結果、マナを発現したことがバレてしまった。うん、フラグを踏んだね。
　その後、ご機嫌で帰って行ったミリー婆ちゃん。
不安だ…。あと母上はすごく綺麗で柔らかかった。
　そして翌日、爺ちゃん達4人が揃ってやって来た。
…どうやら、今日から修行が始まることになったみたいだ。

　これからどうなることやら…。

急にそんなことを言い出した祖母（ミリーねえちゃん）に確認を行う。

「ど、どうしてそういう話になったの？ミリー姉（ねえ）ちゃん」

「なに、マナを発現できるということは力を得たということじゃ。どういう形であれ、力を得たからには正しい使い方を学ばなければならん。
なれば、わらわ達が指導し、一人前にしてやろうと思ってのぉ…」

あと、わらわの暇つぶし兼趣味じゃ。ぼそっと本音が最後に聞こえた気がする。

どうやら、祖父祖母達は皆同じ考えなのだろう、祖母（ミリーねえちゃん）を止めないのが決定的だ。

「ローランドや、ローランドはどんな騎士を目指したい？」

ヘンリーが優しく問いかける。

◆

どんな騎士を目指すか、それは言い換えるならどんな大人になりたいかということ。

「（え～と、うん）悪い人達や悪い魔物から、
力のない人や善良な市民を、そして大切な人達を守れる正義の騎士になりたい…かな」

「なら、わしたちがそうなれるよう導くことを約束しよう」

なに、無茶なことは出来る限りさせはせんよ、と付け加えてくれます。

確かに祖母一人（ミリーねえちゃん）だと逃げ出したい、という考えは思い浮かぶ。

なので、その言葉で安らぎというか安心感を得た気がする。

でも、出来る限りという点が不安だけど…。

強くなりたいという気持ちや、
この世界で生きていく不安や期待、恐怖などのいろんな感情は同じくらいの割合で心に存在していた。

そして、同じ強くなるなら誰かを守るために、
そしていつかできる（と思う）大切な人を守れる力がほしいと思っていた。

その力は、自分がこの世界で生き抜いた、と心から思える証のようなものなのかもしれない。
どこかで中途半端に終わった前世の未練があるのだろうか。

「母様～、ロランちゃんにはまだ早すぎると思うの～」

母上が祖父達に待ったをかける。

自分の今の母親はとても美しく優しい。ムスコンの気があるため、少々自分(むすこ)に対して甘い気はするが…、

今の自分にとって、とても大切な人だと思う。だから守りたい。

だが、母上は自分が強くなることには反対のようだ。

「ミューズ、ちょっとこっちに来い」

ちょいちょい、と祖父(アランじいちゃん)と祖母(ルーねえちゃん)に母上が連れていかれる。

◇

～　Ｓｉｄｅ　ロアーヌ　～

「母様～、私の考えでは～まだ時期じゃないと思うの～」

「ふむ、その心は？」

「もっと～、女王騎士について憧れを抱かせたり～、騎士聖典を覚えさせたり～

ママのことを好きになるように～仕向け…じゃなくて～マナーとか

を～いろいろ教えてる途中なの～」

「「チラッと本音が混じっとるではないか！！」」

洗脳か、と突っ込みを入れながら、話を続ける。

「ミューズ、それは鍛えながらでもできることだ」

「それに、孫にマザコンになられても困るのぉ」

ミューズにはロランが可愛くて仕方ないみたいだ。それこそ、無駄に計画的になるくらいに。

「むぅ～、でもでも～」

「なら、ミューズもより詳しく教養を教えてやれ」

「ん～それなら～…」

「それにロランは、先ほどの言葉通り小さいながらも確たる信念を持っておる」

「母親なら例えどんな事情や考えがあろうとも、子の信念を後押しし、

成長させてやる道を選べミューズ」

「分かりました～」

渋々といった感じで納得するミューズ。

「女王騎士団（クイーンナイツ）の試験には筆記もあることじゃし、、

それに上級小等学校までに最低限のマナーは身につけておかんとならんしのぉ」

「という訳だ、初めからお前かそれ以外の適任者に任せる予定ではあった」

「なればお前にやらせる方が都合がよいと思ってのぅ」

「他人には～、任せません～！」

娘の孫に対する自分達以上の溺愛ぶりに別の心配が湧いてくる。

「「ウィルにも構ってやれよ（構うようにの）」」

夫婦仲が悪くなっては、元も子もない。

「ちゃんと考えてますぅ～」

どうやら計画的犯行らしいな。

まぁ、何はともあれ話はついた。

～ Side out ～

しばらく何かを話し合った後、母上たちが戻って来た。

「ロランちゃ～ん、今日からママ達と一緒に頑張りましょうねぇ～」
「うむ、6歳から行くこととなるアルシリア王国上級小等学校に入るまでには、
きっと一人前にしてやるぞ」
…なにを祖父達は話したんだろう？
あの、天然だが自分の意見を曲げない母上が納得させられたなんて…。
さすがは母上の両親といったところなのだろうか？
そして、さりげなくだが学校に通うという事を聞かされた。
全く考えなかったわけではないが、変な気分である。
アルシリア上級小等学校、どんな学校だろうか？
少し考えてみるが、ちょっと想像がつかない。少なくとも前世の学校と同じなわけないだろう。
それと気になった点がもう一つ。
母上は《ママ達と一緒に》と言ったような？
「ねぇ、エレンお婆ちゃん、お婆ちゃん達は何を教えてくれるの？」
「…そうねぇ、私は剣などの武器の扱い方や武具を用いた戦闘や戦

術を教えてあげるわ、ロランちゃん」

まずはエレンお婆ちゃんが教えてくれる内容が判明。

エレンお婆ちゃんって武器の扱いが上手いってことかな？

元女王騎士（クイーンナイト）だし、やっぱり強いのかな？

少なくとも弱くはないだろう。

「ところでロランちゃん…、ミリーは姉（ねえ）ちゃんなのに、私はお婆ちゃん…。

呼び方を変えましょう？」

「エ、エレンお姉（ねえ）ちゃん…。こ、これからよろしくお願いします。」

「ふふふ、ありがとう」

「なんじゃ、妬いておったのか？」

「えぇ、それはもう」

その空気というか、滲み出る雰囲気からおそろしい何かを感じた気がする。

やはりただのお婆ちゃんではなさそうだ。

「俺は基礎体力や筋力の向上、素手での格闘術を指導する」

次に、アラン爺ちゃんが答えてくれた。

確かに、武器を持たない状況下の戦闘では、己の身体能力や格闘

術が生死を分かつ。

だが、確か昨日祖母がヘンリー爺ちゃんと素の実力は互角と言っていた。

疑問に思ったので聞いてみる。

「でも、アラン爺ちゃんとヘンリー爺ちゃんは素の実力は同じって昨日聞いたよ？」

「阿呆か、俺の方が身体能力や格闘術では圧倒的に強いわ」

「阿呆はひどいぞ。」

「やかましい。クソ、こいつは小賢しい技や俺のマナから攻撃を読み取るのが上手いだけの話だ」

「アランの行動は読み易いからな」

ヘンリー爺ちゃんにそう言われ、ますます気を悪くする爺ちゃん。

「（お前が異常なだけだ）「えっとつまりアラン爺ちゃんは格闘術や身体能力は強いってことでいいんだよね？」当たり前だ！！現役の女王騎士にも負けるつもりはない！」

たしかに老人の肉体には見えない。

これだけ自信があるなら自分も得るものが多いはず。

「よろしくねアラン爺ちゃん」
「任せておけ」
「（父様のせらてる～）わｔ
爺ちゃんは機嫌を直してくれたようだ。
母上がなにか喋ろうとしていたが、ヘンリー爺ちゃんが遮った。
「わしはマナのコントロールや扱い方等について教えてあげよう」
…ぶぅ」
今度は母上が不機嫌そうだ。
以前から聞かされていた通り、
ヘンリー爺ちゃんはマナのコントロールがとても上手いらしから、
納得と思う。
さっきアラン爺ちゃんが言っていた、
小賢しい技やマナからの行動予測といったものも教えてくれるかも
しれない。
「ローランドならわしの全ての技を習得できる。そんな気がするよ」
ヘンリー爺ちゃんの技は豊富らしいので覚えがいがある。
戦いの幅も増えそうだし、とても面白そうだ。
「できるかどうか分からないけど頑張る」「あぁ、できるとも」
優しく笑いかけてくれる。

うん、頑張ろう。

そしてついに痺れを切らした本命が釣れた。

「ママはねぇ～、教養全般と聖典なんかの知識を～教えてあげるねぇ～」

やはり聞き間違いはないようだ。

まぁ、拒否はできないかな。どのみち、一般人だった自分が貴族のなんたるかなんて、知るわけがないのだから。聖典にしても何の役に立つかわからないし…。

貴族の教養って自分が思う教養と異なるかもしれないしね。

「母上もよろしくね？」

「任せてぇ～」

ギュッっと抱き締められる。

柔らかさを堪能しつつ疑問が浮かぶ。

肉体強化、マナコントロール、教養等の知識、武器に関する扱い方等、格闘術

大体のものがそろっている気がする…。

しかし、一人まだ何をするのか発言していない。

むしろ、主犯格で参加しそうな人物である。

「…ミリー姉ちゃんは？」

「わらわはその他いろいろ応用担当じゃ！楽しみにしておくが良い」

応用、物凄く幅広い解釈ができそうだ。

ま、無理そうな内容ならちょっと、加減して貰えるようお願いすればいいか…。

「お手柔らかにお願いね、ミリーお姉ちゃん」

「心配は無用じゃ！気にせず励んで強くなればよい」

「うん、頑張る」

その後、教える順番など話し合い、修行を行うことになった。

かくして修行は始まった。

初日の今日は、ヘンリー爺ちゃんから始まった。

葉っぱを浮かべたタライの水にマナを流して葉っぱだけを動かしたり、弾く修行を行うことになった。
全体にマナを通すのと一点を狙って操作するのは難易度が全然違った。
どうしても多少周りの水を巻き込んでしまった。
でも、初日にしては上出来以上だったらしい。

次に、アラン爺ちゃん。

全力の七割くらい速度で数時間走った後に筋力トレーニングを行った。
これまた、数時間も走ったことや、筋力トレーニングの結果が予想以上だったらしい。
驚かれてしまった。この分だと格闘に関することに早めに入れそうだと言われた。
でも、すでに疲労困憊です。正直、今日はこれ以上無理だと思った。

次に昼食がてらマナーを少し母上から指導してもらった。

昼食は上薬草や薬草を用いた料理が出てきた。疲労困憊だったはずの体が回復した。
薬草の認識を改めた方がよさそうだ。間違いなくこれから毎日のメニューに組み込まれるだろうし。
味は独特だけども…。そのうち、毒の耐性をつけるための食事も出したいらしい。
母上がまた反対したけど納得させられていた。
マナーがてらの昼食の後、引き続いて母上から騎士聖典の勉強をさせられた。
覚えることは多そうだった。

次に、エレンお姉ちゃん。

初めに、武器は何を使いたいと聞かれたので双剣と答えたので
片手剣をある程度のレベルにした後、双剣に移ることになった。
理想は槍や弓なども一通り行い、特性を把握しておくこと方がいいらしい。
まぁ、それは双剣に移ってからある程度つかえるようになった上で
並行して覚えていくらしい。
とりあえず初日の今日は、刃を潰した鉄の剣で素振りをすることになった。
木剣からじゃないのが驚きだった。
なんでも、午前中の筋トレで鉄の剣でも振れるのではという話になったらしい。
事実振り回せた。でも、木剣のように、狙い通りに素振りはできなかった。
まずは思い通りに素振りができるようになった後、体の一部のように剣を使えるようになれば、
片手剣の技などを教えてくれるらしい。少し楽しみだ。
余談だが、エレンお姉ちゃんはアルシリアの戦姫とか武神とか言われてたらしい。
剣や槍を含めた全ての武器の達人らしい。
家(うち)の爺ちゃん達って凄い人ばかりかもしれない。

最後はミリー姉ちゃん。

ミリー姉ちゃんは自然のマナをより詳しく感知できるように瞑想を言いつけられた。
火とか風など属性のマナを感じろということらしい。意外にマトモだ。意外すぎる。

精霊剣（エレメンタル・セイバー）を使うための基礎中の基礎らしい。
精霊剣（エレメンタル・セイバー）とは、己のマナと大気や自然に存在するマナの力を借り同調し発動する
上級女王騎士剣技（ハイ・クイーンナイツ・アーツ）のことを指す。
　でも、属性のマナを敏感に感じ取れるようになっても、
精霊剣（エレメンタル・セイバー）はマナのコントロールが一定のレベルに達するまでは試すのは禁止された。
暴走させないための処置らしい。
初日だがある程度いろんなマナを感じ取れた。小さい頃から努力した成果だと思う。
これも想定外だったらしい。

まぁ、こんな感じで修行の日々が始まった。
思っていたほどの無茶ぶりはなかったので一安心だ。

・　・　・

と考えたのがいけなかったのか、甘かったのか。
数か月後…

崖を背にオークと対峙する自分がいた。

待するがよいぞ　―

次回　第四話　初めての死闘

―期

第三話　レベルアップ開始（後書き）

次話初めての戦闘描写…、少し緊張。

世界設定？（前書き）

反論は認めない、受け付けない。
まぁ、参考程度のものとしてご覧ください。

世界設定？

1．暦について

1月から12月

カプリコーンの月
アクエリアスの月
パイシーズの月
アリエスの月
タウラスの月
ジェミニの月
キャンサーの月
レオの月
バルゴの月
ライブラの月
スコルピオの月
サジタリアスの月

日数は365日で変わらないものと考えてください。

女王騎士団（クイーンナイツ）の試験は5年に1度のパイシーズの月3日

2．属性について

炎
氷
風
土
雷
命（操と医）

原作に出てきた属性である。

これをマナで解釈すると

炎
氷
水
風
土
雷
光
闇

命の操と医は闇と光になります。
無手の状態で水のマナを感知し集める技術があれば水の精霊剣（エレメンタル・セイバー）
アクアセイバーは使用可能です。
無手からの水の剣の精製ですね。
ちなみ、月のマナも存在します。
マナとは万物に宿るものである。

3．物質について

女王騎士団（クイーンナイツ）で使われる聖騎装（エンチャント・ギア）の主原料

●魔法金属（オリハルコン）

魔法金属（オリハルコン）は精霊銀（ミスリル）に特別な技術を施して精製する。

軽い、硬い、マナの伝導率が高い、能力付与が可能（これが様々な聖騎装（エンチャント・ギア）の能力の基となる）、精霊銀（ミスリル）以上に希少価値がある。

●精霊銀（ミスリル）

超希少金属。マナの伝導率が高く、丈夫で、錆びない金属。

世界設定？（後書き）

これで、公的にホーリーセイバーやダークセイバーも使用可能だ！！
後悔はしない。
金属についてはレアな2種のみ掲載
決して考えてないわけじゃないから悪しからず。

第四話　初めての死闘（前書き）

豚は鼻がいいです。トリュフを探すのに犬を使うのは、豚だと見つけた瞬間食べてしまうからです。

D●のオークと風●のシ●ンのデブータ系を足した感じのオークです。

気にしないで下さい。

第四話　初めての死闘

～前回までのあらすじ～

ミリー＝ロアーヌじゃ。孫が神童と呼ばれていたので、しばらくじっくりと観察した結果、マナを発現しおった。なので、アランやヘンリー、エレン達と孫を鍛える計画を実行したのじゃ。やることなすことわらわの想像以上の結果を叩き出しおったわ。凄い孫じゃのぅ。

修行を初めて数か月経ち、さらに成長した孫を括目して見るが良いぞ！！

――――――――――――

え～、ただ今オークと向かい合っています。

●　醜悪な豚の魔物、オーク　●

大きさは人の大人と変わらず、頭は良くないが腕力は人より強力。武器を使い人を襲う魔物として有名。色はピンクや茶色が一般だが色が濃い個体ほど強力とされ、黒などの色は非常に危険な存在とされる。

「ブフォ～～！！」

どうしてこんなことになった！？

◆

―　時は数時間前に遡（さかのぼ）る　―

修行を始めてからすでに数か月が経過し、修行内容もいろんなものを行うようになっていた。

今日は領内の森の近くの村に来ている。

ここで今日の修行を行うのだろうか？

「今日は狩りを行うとするかのぅ」

狩りが今回の修行みたいだ。

「狩り？何を狩るの？」

「ラビという獣を狩ってきてもらうぞ」

●　ラビ　●

小型のウサギのような獣でおもに草食だが食べ物が少ない時やピンチの時は発達した前歯で攻撃し小動物を狩ったり身を守ったりする。色は黄色が一般、乳白

色が最も能力が高い種とされている。
人間の騎獣用のビッグイヤーといわれる体が大きく攻撃性のない獣とは全くの別物である。

「（まぁ、今の自分なら大丈夫かな？）うん、わかった」
「この森のその他の危険な魔物は、わし達が排除しておいたから安心するといい」
「マナの流れを感じながら見つけ仕留めるのよ？」
「怪我しちゃだめよ～」
「わらわ達はあの村で待つことにする。何匹でも構わん、狩ってくるのじゃ」

今回は母上もすでに納得済みらしい。

母上達は近くの村で待つことにするようだ。

「今回はこれを使え」

【鉄の剣（ロングソード）を手に入れた】

刃挽きしていない真剣は初めてだ。

少しの緊張と嬉しさ、興奮が生じる。

「ありがとう爺ちゃん」

深呼吸し、気持ちを整える。

「よし、行ってくるね」

祖母達の声援を背に受け森に向かった。

・　・　・

数十分が経過しただろうか？ラビどころか小動物すら見つからない。

生物のマナを周囲に感じない。どうやら、この辺りにはいないようだ…。

少し、奥に進むか？

…ん？

…何かいる！！

「キュ？」

いた！！ラビだ！

可愛い…が今回は狩ることにする。

「ごめんね」

謝りつつも剣を振り下ろす。

「キュ～～」

早い！！躱された。

あ、逃げる！？逃げ足も速い！

「待って！！」

ラビとの追っかけっこが始まった。

（こいつ速い！！）

想像よりずっと速い。

マナから次の移動先が分かってもなかなか追いつけない。

その後もしばらく追っかけっこは続いた。

「（ん、動きが止まった？崖か！！）追い詰めたよ」

崖にラビを追い詰めることに成功したみたいだ。

「キュキュ～」

反転して前歯で攻撃してきた！！

―ガキンと音が響く

咄嗟に前歯を剣で受け止め、

「ここだー！！」

そのまま、地面に向かって剣を叩きつけ、ラビを両断した。

「うわ、服や顔に返り血が付いちゃった」

返り血を浴びてしまった。生臭いというか、気持ち悪い。

ラビを狩ることに成功したので、すぐに村へ戻る準備をする。

血抜きをしてラビを抱えて歩き出そうとすると、森からそれは現れた。

――――――

「ブフォー！」

血の匂いを嗅ぎつけてやってきたのか分からないが、オークと呼ばれる豚っぽい魔物が現れた。

（うん、不細工だ）

「ブフゥー」

こちらに向かって歩を進める。

（血の匂いを嗅ぎつけたのか？偶然来たのか…。
いや、それよりも狙いはラビか自分なのか…。）

試してみるか。

「やっ」

ラビを少し離れた木めがけてオークに見えるよう投げつける。

「ブフォー」

「うぉっ」

ラビに反応は示さずに、こちらに対して手に持った槍を振り下ろしてきたので、咄嗟に躱す。

どうやら狙いはこちらしい。

だけど今ので森側を背にすることができた。

「ここは逃げる」

魔物いるじゃん！めっちゃ危なそうなのが。

ラビはまた後で何とかするとして逃走を試みる、

…がしかし、

「ブファ〜！！！」

なんて奴だ、一瞬で大木を折って投下しやがった。

しかも狙いが正確だ！逃げ道を潰すと同時にこちらも狙って投げた。

「危なっ！！」

間一髪で躱したがその隙に追いつかれてしまった。

こいつ強い。オークってこんなんだっけ？

こいつから逃げ切るのは難しいかもしれない。

「（だったら）やるしかないだろう！！」

オークとの闘いが始まった。

◆

―　村にて　―

「もぅ、狩り終えたころかのぅ」

「ラビは警戒心が強いから見つけるのに時間がかかるかもな」

「動きも速いのがいたりしますものね」

「わしはあの子なら問題ないと思うぞ」

「ロランちゃ～ん、早く帰ってきて～」

―ざわざわ

皆で談笑していると外が騒がしくなった。

「騒がしいのぅ、なにがあった。」

「あ、あの冒険者たちが森でオークに襲われたそうです」

そこには４名の冒険者たちが傷だらけで横たわっていた。

「なにがあった！！オークがこの森に現れたのか！？」

アランが比較的傷の少ない冒険者に話を聞く。

「は…はい、この村に向かう途中で色の濃い茶色のオークに襲われて、戦ったのですが、
敵わず煙玉などアイテムを駆使して逃げてきました」

「まずいのぅ」「まずいな」「オークか…」「あらあら困ったわねぇ」

「ロランちゃ～ん」

ミューズが森へ走って行こうとする。

「待たんかミューズ！！お前が行ってどうする！わらわが行こう」

「ふむ、わしも行こうか」

「うむ、アランとエレンはこの場と周囲の警戒を頼むぞ」

「「わかった（わ）」」

（出会ってなければよいがのぅ・・・。）

「ではすぐに行くかの、ヘンリー」

「わかった」

一抹の不安を抱え、ヘンリーと共に森に向かった。

―――――――――――

◆

「うりゃぁ」

右から袈裟懸けで斬りかかる

「ブラァ！！」

が槍の薙ぎ払いにより受け止められ、弾き飛ばされた。

（マナで強化しても腕力は向こうが上か！！）

力で負けているのでまともに打ち合うのは避けた方が良さそうだ。

（なら、「ブフォー」
ーキィン、キィン
攻撃は受け流す！！）

打ち合うたびに火花が飛び散る。

打ち合いながらも受け流しチャンスを待つ。

「ブルァー！」

小振りの相手を削る攻撃が続く

打ち合うたび火花が散る

「ブルァー！！」

大振りの突き！！ここに合わせる！！

「今だ！！」

受け流さず躱す要領で払い抜けで斬る！

「ブフィ～」

こいつマジで強い。咄嗟に急所を避け鎧で受けるよう身を捻りやがった。

結果、薄皮を斬るぐらいの感触しかなかった。

（なんで、魔物が鎧を装備してんだよ！！）

「ブヒィー！」

心の中で毒づきながら、オークの攻撃をいなす。

「せぃ」

躱しつつ攻撃を入れるが鎧に阻まれたりし、致命傷が与えられない。

「たぁ！！「ブヒィィー！！」
ッ！！」

（く、三段突きから薙ぎ払いか！！）

「フ、ハッ、クッ、ぐぁ、痛ぅ〜〜」

薙ぎ払いを完全にいなしきれず、手が痺れ木に体ごと弾かれた。剣を放さなかったのが不幸中の幸いか。

「ブヒィー！！」

止(とど)めとばかりに攻撃を繰り出すオーク。

「舐めるなー」

―ザシュッ

「ブァァー！！」

カウンターで叩き込んだ一撃は少し浅いが鎧を破壊し肉を切り裂いたようだ。

「よし、勝負はこれからだ」

しかし、こいつ自体の防御力も大したものだ。

今の一撃は会心の一撃だと思ったのに致命傷には至っていない。

もっと、限界までマナを込めて攻撃しなければ今の自分の攻撃力では倒せない。

「ブガァーー！！」

多少なりともダメージを与えたからか、激昂したようだ。

―ブン、ブオンッ

攻撃自体は重くなったが、その分軌道が読みやすくなった。

―キィィン、キィィン

（受け流すだけでも、手が痺れる！長くは受け続けられない！！）

極力攻撃は躱し、大振りを誘うことにする。

「ブハァーー！！」

二段突き、薙ぎ払い、回転突き

怒涛の攻撃で襲いかかる。

「ぐ、や、はっと」

こっちも初めての命の奪い合いに体力の消耗は激しい。

次のチャンスを最大限に生かす。

「ブルァァ―！！！」

来た！！大振りの一撃

ここに全力の一撃を合わせる

「うらぁー！！」

―ズバン

カウンター気味で入れたマナを全力で込めた一撃は、オークの右腕を斬り飛ばした。

「ブオオォー！！」

さすがのオークも大ダメージだろう。そう思い、マナを消費した疲労感から少しの油断を招いた。

―ブンッ

と音が聞こえ振り返ると残った左腕で殴り掛かってきていた。

反転してガードするが少し反応が遅れた。

「ぐぁ――！！」

結果、痛恨の一撃を受けてしまった。すぐに反撃できるとは考えが及ばなかった。

（痛ぇ～～！やばい、やばい！！たぶん肋骨がやられた！！）

「ブァァー！！！」

かなり向こうも頭にきているようだ。

このままではこちらの方が分が悪い。

今の状態では、長くは躱せない。

何かないか、マナを込めた全力の一撃で腕を斬り飛ばすに至った。

しかし、肋骨が今の状態で同じ攻撃ができるか分からない。

このままでは分が悪い。なにか、手はないのだろうか？

足りない分の攻撃力を補うなにか……。

……あった、精霊剣（エレメンタル・セイバー）だ！！

炎の精霊剣（フレイムセイバー）ならオークに対して効果抜群だろう。

問題は使ったことがない事。その一点のみ。

（ここで死んでたまるか。まだ、始まったばかりなんだ）

「ここで、終われるか…！！」

心の闘志は消えていない。ならば、暴走しても構わない、ここで死ぬくらいなら

禁止されてる技を使ってでも生き抜く。

幸いにも火花を散らしたおかげで必要なマナは十分だ。

「ブファ―！！」

怒りに身を任せた、だが子供の身には致死の一撃をオークが放つ。

（死ねない、まだ死ねない、ここで生きると決めたんだ！！）

力を貸せ、炎のマナよ！！）

「フレイムセイバー！！」

残る最後の力を振り絞り、炎の精霊剣（エレメンタル・セイバー）で袈裟斬りに斬る。

暴走せずに使えたが、もうマナが残っていない。これで倒せなければ…

―ブシュウ、ゴオォォー

「ブゥアァァー！！」

斬った先から炎がオークを包み込み、周りの木々すら激しく燃やす。

（そのまま倒れろ！！）

こっちはもう限界なんだ。もう、まともに立つことすらできない。

しばらくたつと、火が消え、静かになった。

オークが黒こげになり、じっと立ったまま動かない…。

死んだのか？

そのまま倒れてくれ！！

「ブァァー！」

オークが雄たけびをあげた。

（くそが…）

俺はそこで意識を失った。

――――――

―　ミリーＳｉｄｅ　―

「ヘンリーどのあたりじゃ」

「ふむこっちの道だ、急ぐぞ！」

「あぁ、いやな予感がするのじゃ！！」

こういう時の感は当たる。無事でいるのじゃぞ！ロラン！！

「ミリー、あそこだ！！あそこに全力で行け」

ヘンリーが木の上に突如飛び乗り指をさす。

わらわも木の上に乗り確認する。

「（木が燃えている！！）あそこか！！」

全力で急行する。自然な火災ではありえない。数日前は雨が降ったのだ。

炎のマナが多量に存在するわけがないのだ。

孫が炎のマナを何かしらの方法で使用したに違いない。

ラビ相手に禁止したことを孫がするとは考えにくい。

まず、間違いなく話に聞いたオークと闘っているのじゃろう。

「無事でいるのじゃぞ！！」

――――――

「ブァァー！」

右腕のないオークが黒焦げで吠えて、ロランの前に立っている。

「そこまでじゃ！！」

何とか間に合った。

気を失ってはいるが、命に別状はなさそうじゃ。

孫の無事を確認し、オークに対峙する。

なるほど、このオーク、体毛から察するにオークの中でも割と強力な個体だったようだ。

「む？かかって来ぬのか？

…こやつ、死んでおるのぅ」

立ったまま絶命したようじゃの。

…なんじゃ、つまり、孫（ロラン）一人で討伐したということか。

この年でこれほどのオークを仕留めるとは…。

気絶してるので、辛勝といったところか。

む、鉄の剣（ロングソード）が少し熔（と）けとるのぅ。

かなりのマナを込めてフレイムセイバーを使用し、

暴走を起こさなかったが剣の方が耐えられなんだというとこじゃな。

「全く、凄い孫じゃのぅ」

わらわは感心しつつ孫をそっと抱きかかえた。

〜 Side out 〜

次回第五話へ続く

―ロランちゃ〜ん、早く目を覚まして〜―

第四話　初めての死闘（後書き）

戦闘は少し短くしました。長時間闘う子供っていうのもねぇ…。
物足りなかったら申し訳ないです。
まぁ、楽しんでいただけたのなら幸いです。
精霊剣（エレメンタル・セイバー）の補足説明を次話に入れることにします。

第五話　その後と急成長（省略）且つ入学前夜なのですよ（前書き）

設定等が受け入れられないなら退室した方が双方のためですよ。
そうでない方は稚拙ですがお楽しみください。
遅くなり申し訳ございません。
途中放棄はしませんので。

第五話　その後と急成長（省略）且つ入学前夜なのですよ

～前回のあらすじ～

ロランちゃんのママのミューズよ～。ロランちゃんは～物凄く愛らしいの～、
どんどんかっこよく成長してるの～。
もう可愛くて可愛くて～。

・
・
・

（以下略）

で～、最近成長著しいロランちゃんは～、修行で～森に狩りへ行かそうって話になったの～。
反対したけど、母様や父様が森の危険な魔物は片したみたいだし～、大丈夫だと思ったの～。
けど～、傷ついた冒険者の一団が滞在していた村にきて～、なんでも～オークが森に現れたらしいの～。
ロランちゃん～、無事に帰ってきて～！！

――――――――――――――――――――――――――――――――

◆

「う…ん…？あれ？ベッド？」
「ロランちゃ～ん！！」
起きてすぐに母上の胸に抱き締められる。
「ふむ、目が覚めたか」
「ふふ、そうね」
「ミューズちゃんや放しておやり、苦しそうだよ」
「ぷはっ、えっと、たしかラビを狩って、その後…」
母上の豊乳から解放され考える、あ、母上今度は後ろから抱き締めるようだ。
「覚えておるかのぅ？」
「えっと、オークが現れて、逃げようとしたけど闘いになって、オークの腕を斬って、攻撃くらって、フレイムセイバーを使ったけど倒せなくて、
気を失ったんだっけ…。そっか、負けちゃったのか。
えっと、ミリー姉ちゃんが助けてくれたの？」
自分の未熟さが少し悔しく俯(うつむ)く…。
「うむ、助けはしたがそれは違うのぅ」
ん？どういうこと？

祖母の言葉に顔をあげる。

「えっと、僕が見たときはオークは…」

「立ったまま絶命しておったのぅ」

なんだって？

立ったまま？

…それって、え？

「一人でオークを倒したんだよ、頑張ったねローランド」

勝っ…てた？

あのオークはあの時死んでいた！？

「ローランちゃん」

母上が優しく抱き締めてくれる

「…うわぁぁ～ん！！」

それによって緊張が切れたのだろうか、

悔しさと嬉しさとよくわからない感情がごちゃ混ぜになって

この日初めて大泣きした。

＊＊＊＊＊＊

あれから数日経過した

怪我はすでに治ってしまった。

骨は折れたと思ったけど、ヒビが入っていただけだった。

打撲の痛みと伴って折れたと勘違いしたみたいだった。

特薬草なるフルコースを毎食いただいた。

うん、薬草のフルコースは凄いと思い知らされたよ。

今回のオークについては祖父達も想定外の事態だったらしく、

本当に無事でよかったとのことらしい。

ちなみに、俺が倒したラビはヘンリー爺ちゃんが回収し、

肉は食事へ、毛皮はミリー姉ちゃんの私物に、尻尾は母上のアクセサリーになったようだ。

オークと闘ったことにより、修行内容も安全且つ厳しくなるらしい。

今回のような狩りには必ず誰かが一緒にいることが決定された。

ヘンリー爺ちゃんはより細やかなマナコントロールを教えてくれるようになった。

相手のマナを読んで闘う術等についても教え始めてもらえるみたいだ。

アラン爺ちゃんはより強靭な肉体をつくること、体術の修行を始まった。

肉体改造は地味に一番重要なので、地道に頑張るしかないと思う。

幸い筋肉痛も薬草で治るし…。

耐毒の修行も行うみたいだ。

初めは弱めの毒を薄めてはじめるらしい。

少し怖い…。

エレンお姉ちゃんは双剣の修行に入るようだ。

片手剣の技と双剣の技も教え始めてくれるようだ。

クロスブレイクとか十文字斬って縦横十字か斜め十字の違いだけだと思うんだけど…。

ともかく、地力をつけるために頑張りたい。

ミリー姉ちゃんは今回のことから、

本格的に精霊剣（エレメンタル・セイバー）の修行を行うみたいだ。

今回は使用出来たが、本来精霊剣（エレメンタル・セイバー）は女王の剣（クイーン・セイバー）を媒介に使用する技

らしい。

これは、女王の剣（クイーン・セイバー）はマナの伝導率が非常に高く、普通の剣はとても低い、

普通の剣で行うのは、よほど効率よくマナを集め集約しないと発動は不可能なためらしい。

普通の剣ではマナを伝導しづらく、マナを剣に溜めにくいためだ。

今回使用出来たのは剣に込めた莫大なマナの量が剣を覆い

マナの伝導の促進剤のような役割を果たしたためと言われた。

マナの潜在量が多く、正しく感知し集め、発現を狙い通り行い、マナのコントロールを行う、

どれも相応の技量や才能が必要だ。どれか一つ欠けていてもダメだっただろう。

3歳でできるってチートだよね、どう考えても。

ともかく、きちんとした指導の下行われるようだ。

精霊剣（エレメンタル・セイバー）の名前は案外適当らしい。

アイシクルセイバーがアイスセイバーだったり、サンダーセイバーがプラズマセイバーだったり。

自分が使いやすければそれでいいとのこと。

個人の自由っていいよね。

でも、本当に強くならなくてはいけないと思う

褒められはしたけど、もしも、オークが複数で現れていたら、

祖母達が助けに来れず、ほかのモンスターが現れたとしたら。

結果論で見れば問題ないが、もしもを考えると今の強さではどうにもならない…。

もっと強くなりたい。

祖父達の修行以外にも訓練を行おう。

もう、だれにも、なににも負けないよう強くなる！

海●王に俺はなる！！

間違った、最強の騎士に俺はなる！！

うん、間違うと締まらないね。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

◆

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

さらに約3年の時が経過した。

【ロランはレベルが上がった】

なんつって、現在6歳です。

少し大きくなりました。

誰に似ているって？

ん〜、あえて言えば、D●5の某少年勇者かな？

俺は薄く輝く銀髪だけど。

髪の毛は母上の要望で伸ばしています。

たしか、メインキャラの一人が灰色に近い濃い銀髪のロンゲだったと思うので、

いつか切って短くしたい。

以前そう言ったら、母上が泣きそうな顔になったので実行できなかった。

作戦が必要？もしくは時間か…。

要課題だ。

それと、かねてから言われていた通り、

明日のアリエスの月の６日から学校に入学することになった。

以前話に出てた、アルトリア上級小等学校にだ。

うちの領から毎日王都まで通うのは時間がかかるため、

王都にある父上の別邸で母上と暮らすことになった。

修行については一人二日毎に教えに来てくれることになった。

この数年でかなり強くなったと思う。

マナのコントロールは爺ちゃんと同じレベルぐらいにはマスターしたし、

技も強力なの多いし…。

素の実力も大分爺ちゃん達に近づけたんじゃないかと思う。

後は、体が大きくなって、リーチや膂力のさらなる向上を目指す

といった感じかな？

入学祝いには、精霊銀（ミスリルダガー）の短剣を護身用として2本もらった。

結構な金額がかかったと思われる。

護身用とはいえ自分専用の武器なのでテンションがあがった。

それに対し、少し憂鬱なのは、学校に入ると同時に社交界にも顔を出さなければならないことか…。

ただのパーティーならともかく、偉い大人達を相手にするっていうのがなぁ…。

俺の誕生日自体はつい先日終わったし、身内だけだったから気楽だったけど・・・。

まぁ、なるようにしかならないかな？

深く考えるのはよそう。

うん、気にしない、気にしない。

作戦　気楽に行こうぜ　を採用だ。

「明日はどんな一日になることやら」

「ロランちゃ～んｚｚｚ」

横で眠る母上…。

母上からもマナーや教養をみっちり仕込まれた。

（無駄にしないようにしないと…）

公爵家のご子息やご令嬢なんかも同年代かな？

他の侯爵や伯爵ってどんな人たちだろう？

いやまずは、学校に慣れることを考えよう。

でも、友達って大切だよね。

特に同年代の。

友達１００人できるかな。

１００人もいらないけどね。

次回へ続く

第五話　その後と急成長（省略）且つ入学前夜なのですよ（後書き）

次話からようやく原作キャラが登場となります。
お待たせしましたでしょうか？
次話の前に閑話で父親を出したいと思います。
あまりに空気なので…。
あと、更新は脇道にそれたり、時間が取れなかったりで、
遅くなり申し訳ありません。
週一か月二には最低でも努力します。
オリジナル小説のネタが浮かぶ浮かぶ。
題名だけ出すなら、王が紡ぎ出す物語、通称王紡（おうつむ）や
虎人（ワータイガー）とか。
まぁ、まだ書く気はありませんが。
もっと文章表現力が向上したら考えます。
時間的にも並行してやるのは無理だし。

閑話　ウィリアムの考察（前書き）

早く本編すすめろよとおっしゃる方もいるかもしれませんが、
勘弁してください。
楽しんでいただけたら嬉しいです。

閑話　ウィリアムの考察

お初にお目にかかる、ウィリアム＝アウスバッハだ。

俺には可愛い奥さんがいて、息子ローランドが生まれ、我が人生順風満帆だ。

ただ、息子（ローラン）が生まれてから妻が息子にかかりきりで、仕事も忙しためあまり会えないのが寂しい。

したがって、息子にも会う時間をあまりとってやれていない。

妻や侍女達に息子のことはほぼまかせっきりなのだ。

息子は生まれた時から、無意味に泣かなかったり（夜泣きすらトイレ以外なかった）、

こちらが喋っている時は黙って聞くそぶりをしていたり、普通の子よりも早く喋りだしたり、

読み書きを覚えた等の理由から神童と執事や侍女達が噂しだした。

それだけならまだ良かったのだが、３歳の時に義母の前でマナを発現したようで、

義母や父上達が息子に修行をつけるようになった。

３歳で修行って正気を疑ったが、父上達は本気のようだ。

俺は昔４人に稽古をつけてもらったことがあるが、あれは子供ができるものではない。

俺は心傷（トラウマ）になったわ！

心配になったので、父上や義母達に聞いたところ、

「加減はするぞ」
「あらあら、大丈夫よ」
「同じ失敗はせん」
「わらわに任せておくがよい」

息子よ強く生きろ！！

助け舟はだせん…。

それに、妻も息子に何かを教えることになったようだ。妻も嬉しそうだ。

少しだが疎外感を感じたよ…。

なんとか、妻と一緒にいる時間を増やそうと試みたら…

「ミューズ、ロランのような子をもう一人作ろうか」

「ロランちゃんがもう一人…、ダメよっ！！（悶え）死んでしまうわ～」

なぜだ、何がいけなかった。

妻は息子とよく一緒に寝ているし、マジで寂しい。

「父上…」

息子よ、いたのか。

というか、そんな目で父を見つめるのはやめるのだ。

ただ、妻とイチャイチャしたいだけなのだ。

まぁ、他の女を…と考えたら妻が時間を作ってくれているので、なんとか我慢する。

「父上、頑張ってください」

ポンと肩に手を置かれる。

息子に励まされるとは…。

◆

息子(ロラン)が修行を始めて数か月が経過した頃だろうか、

近くの村の森に狩りに出かけるようだ。

義母達が魔物を掃討したと言っていたので、問題はないだろう。
と、思っていたが冒険者を襲ったオークが森に現れたようだ。
それを聞いた時は、義母達が何とかするだろうと思っていたのだが
息子とオークが遭遇し戦闘になったようだ。
しかも、息子は逃げずに最後まで闘い、オークを仕留めたという
ではないか！！
いくら数か月両親達の修行（しごき）に耐えたとはいえ、有り得んぞ！
3歳の子供が魔物と遭遇し逃走し生き残る、それだけでも奇跡な
のだ。
仕留めただと！！　息子は化け物か！！
いや、化け物の血は引いているな…。4人ほど…。
あの4人を超える化け物になるかもしれんな…。
特に義母には似ないでほしいのだが…。
さすがに無傷ではなかったようだ。仕事を片づけ会いに行くと
「あ、父上」

「ふむ、思ったより元気そうだなロラン」

息子は侍女達に看病されていた。

「えぇ、ヒビが入っているだけで済んだので」

「ふむ、特薬草と栄養のある物を手配しておいた。安静にしておけばすぐに治るだろう」

「はい、ありがとうございます」

「うむ。ところでなぜオークから逃げなかったのだ？」

聞いた話では襲われた冒険者も弱くはないとのことだった。

「最初は逃げようと思ったのですが、あのオークから逃げるのは難しいと判断しましたので」

それで闘って勝つのがまた凄いな。

「それで覚悟を決めてか…。ともかく無事でなによりだ」

―ガチャ

「あら～、あなたぁ～」

「なんじゃ来ておったのか」

「ウィルか」

「あらあら」

「ウィリアム仕事はいいのか」
席を外していた妻と父上達が部屋に入ってきた。妻達は食事に行っていたのだろう。
ついでに執事が息子の食事を持ってきた。
「仕事を片づけて来ました」
「そうか」
「やはりまだ早すぎるのではないかと思うのですが」
これを機に考えを変えてもらった方が息子のためと思い、言うことにした。
「これからはこんなことにはならんよ」
「そうだこんなことにはならん」
二人そろって断定か、実は仲いいよなこの二人。
「私たちがしっかりと管理するわ」
母上、それが心配なのです。
「その代り雑用はウィルに全部押し付けるでのぅ」
それは今まで通りですか、まさかそれ以上にということですか。
「もちろん後者じゃのぅ」
考えを読まんでください。
「父上…」
何かを言いたそうにこちらを見る。
息子よ、そんな目で父を見るのは頼むからやめなさい。

「ロランちゃ～ん、あ～ん」
あぁ、妻は息子から離れない。
執事から受け取った食事を妻が息子に食べさせようとしている。
…妻を独占して羨ましいぞ息子よ！！

■

時間ができた時に息子を少し観察してみた。
ふむ、妻が礼節で教えたのだろうか、オハーシの使い方が上手いではないか。
あれだけ上手く使えるのは妻の教え方が良かったのだろう。
妻よりも上手い気もするが…。
あれなら外でオハーシを使うことになっても恥ずかしい思いはすまい。

妻達が傍にいない時というのはあまりないみたいだが、
そういう時は侍女達とよく一緒に過ごしたり、隠れてトレーニングしているようだ。
…あれだけの修行（しごき）の後にまだ動けるのか。
我が子ながら末恐ろしいな…。
才能ある上に努力を怠らないのだ、大人顔負けに強くなるわけだ。
侍女達と一緒にいる時を見てみた。
…ふむ、息子は巨乳が好きなのか？
そういう侍女と一緒にいることが多いな。
お気に入りはフレデリカとマリーだな。
この二人は癒し系でもあり、執事達にも人気の侍女だ。
二人も息子相手にはより優しくなるな、あ、抱きつかれた。
息子も妻が嫉妬しそうなくらいに満面の笑みで抱かれている。
これは妻の影響もあるのだろうな、なにせ小さい頃は四六時中妻がいたからな。
む、妻も戻ってきたようだ。妻にも抱きつかれたな。

…息子よ、父は羨ましいぞ！！

■

さらに数年経過し６歳になる今では、息子はさらに成長して

マナコントロール　父上と同等

マナの総量　義母と同等

身体能力　女王騎士従騎士級並（クイーンナイト　スクワィアクラス）

装備品　精霊銀（ミスリルダガー）の短剣×２
貴族の子供服

使える技等が

片手剣、双剣
払い抜け
十文字斬

双十文字斬
剣閃　（※斬撃をマナで固定し飛ばす遠距離型の斬撃）
クロスブレイク
等々

体術
投げ技
打撃技
等各種

各種精霊剣（エレメンタル・セイバー）
フレイムセイバー（炎の精霊剣）
トルネードセイバー（風の精霊剣）
グランドレイズ（土の精霊剣）
アイシクルセイバー（氷の精霊剣）
サンダーセイバー（雷の精霊剣）　↑　息子はプラズマセイバー
と言って使っていた。
???
???
???

その他いろいろな技を父達が教えたようだ。

どんだけだよ！！無茶苦茶ではないか！！

本当に子供か！？

あの両親達がいくら性格的に丸くなったとはいえ、

並の修行ではなかったはずだ。

よく耐えたな、というかますます人外な子供になったな。

もう、息子関係で驚くのはやめようかな…。

6歳の誕生日にはお披露目はせずに高価な精霊銀（ミスリルダガー）の短剣を2本プレゼントされたみたいだ。

妻や父上、義母達は息子専用の武器、しかも短剣といえど、普通の短剣よりも大きいそれを領内で一番の鍛冶屋に精霊銀（ミスリル）を持ち込み作らせたようだ。

精霊銀もマクノイス産の良質なものを取り寄せたようだ…。

その帳尻は俺にくることになったし…。損な役回りだ。

まぁ、息子が喜んでいるのが幸いか。

アルトリア上級小等学校に入学するので王都にある別邸に妻と共に住むようだ。

できるだけ、王都に行く仕事を増やそうと思う。

学校に行っている間は妻も暇だろうし、妻との時間を増やせるだろう。

父上や義母達は交代で数日毎に息子を修行させるみたいだ。

これ以上急いで強くすることもないと思うのだが…。

せめて妻との時間を邪魔しないでほしい。

これからは息子も侯爵家跡取りとして社交界に顔を出すことも増えよう。

他の貴族のご子息やご令嬢と会うことになるだろう。

是非とも同年代の公爵家のご子息達とは上手くやってほしいものだ。

友達になってくれればいうことはないんだが。

姫君は同年代だが、おそらくだが学校には来ずに、自宅学習になるだろう。

警護や帝王学等いろんな兼ね合いもあるだろうしな…。

まぁ、姫君と息子を会わせるのは姫君の誕生会のパーティーになるだろう。

マナーについては妻が教えているようだし、問題はないだろう。

なんにせよ息子のこれからに注目をいったところだな。

息子よ、あまり構ってやれんが父はこれからも見守っているぞ。

リアムの考察　了　―

―ウイ

閑話　ウィリアムの考察（後書き）

ウィリアム＝アウスバッハ
　ロランの父親。
アウスバッハ、ロアーヌ領内の内政や雑用を引き受けている。
妻が息子にべったりで寂しい。
ネーミングセンスはゼロ。
　の父親視点でお送りしました。
次話から公爵家の４人が登場します。
頑張ります。批判は受け付けませんよ。

第六話　出会いと芽生え（前書き）

お待たせしました。
オリジナル設定が入っています。
楽しんでいただければうれしいです。

第六話　出会いと芽生え

～前回までのあらすじ～

どもロランです。
この世界に生まれ変わって、三歳になりいろいろあって修行が始まった。
それから数か月後オークと闘い、辛勝できたみたいだけど、もっと強くなろうと思う。
生まれ変わってすぐに死にたくないしね。
　さらに数年経過し、６歳になった。そこそこ強くなったと思う。
満足はしてないけどね。
６歳の誕生日はお披露目はせずに身内で行い、自分専用の武器として精霊銀（ミスリルダガー）の短剣を
２本誕生日プレゼントとしてもらった。テンションあがった！
６歳になったのでこれからは社交界にも連れ出されるらしい。
貴族に生まれたら仕方ないということで適度に頑張ろう。
そして、アルトリア上級小等学校に入学する日になった。

―――――――――――――――――――――

《アルトリア王都　アルトリア上級小等学校》

現在入学式が行われています。

うん、どこの世界でも入学式は退屈ということが分かった。

女王陛下の挨拶でもあればいいのに。

「これからの君たちの・・・・・・・」

話は聞き流し、考え事をする。

考え事というか、後ろの親達が豪華で気になる。

実際感じるマナも大したもんだと思う。祖母達の方が凄いけど。

六大公爵家の方々が４人もいるのだ。

ていうか、母上もそこに加わってるよ。なんか談笑してる。

お知り合いですかー！！

クラス発表はこの後だけど、公爵家のご子息達と別のクラス…にはなりそうにない気がするよ。

女王騎士（クイーンナイト）も数人紛れているな。

警護の任務だろうね。

同学年には４人の公爵家のご子息、ご息女がいる。

イージス＝ブリュンヒルデ、ルカ＝グラム、キャロル＝ルナハイネン、ジェダ＝バンニール

うん、原作キャラだね。だいたいの性格ぐらいは覚えてる。

顔は実物の方が美男美女だね。親も含めて。

あ、親たちが口喧嘩始めたよ。

なんというか、うちの子の方が可愛いとかの言い合い？みたいだ。

あ、女王騎士らしき人に止められた。

てか、母上声抑えて…。

あ、入学式終わったみたい。

クラスについて書かれたプリントが配られてきた。

…はい、そうですよねー。そうでしょうねー。

予想通り同じクラスになりましたとさ。

◇

クラスに移動し、親たちは教室の後ろで見学、先生の挨拶と自己紹介、
そして生徒の自己紹介になった。

公爵家から優先的に手短に自己紹介させるようだ。

「ブリュンヒルデが嫡男イージス＝ブリュンヒルデだ。皆よろしく頼む。…」

堂々としてるなー。性格はイメージ通りかな。クールだけど冷たいわけじゃなかったはず。
あと、男だよ。間違っても女じゃない。髪は伸ばしてるけど。好物は鴨のロースト、と。

「バンニール家次男ジェダ＝バンニールだ。俺様に逆らうんじゃねぇぞ！…」

うん、こういうガキ大将タイプってどこでも絶対いるよね。
まぁ、端から見ているぶんには問題ないかな。からまれると面倒そうだけど。

「ルナハイネン家キャロル＝ルナハイネンですわ。私の下僕（わたくしのいぬ）になる人は歓迎しますわ。…」

きれいな人形のようだ。予想以上に可愛い。でも口から飛び出てる言葉はひどいと思うよ。
黙っていれば可愛いタイプだね。その性格は改善した方がいいと思う。早急に。

「グラム家次男ルカ＝グラムです。皆さん宜しくお願いしますね。…」

仲良くしましょうと美少年スマイル。人当たりのいいタイプだね。幼いからか気弱そうに見える。争いなんかは好まない性格のようだ。

実はこの４人が自己紹介してる間後ろの親が…、いや語るのはやめておこう。

警護担当の女王騎士（クイーンナイト）さん目上の人を諌（いさ）めるのご苦労様です。これを止めるために近くにいたのだろうか…。任務の一環かもしれない、お疲れ様です！！

その後は侯爵や子爵、男爵等ばらばらに座っている順に自己紹介が続いていき、自分の番がやってきた。

「侯爵家嫡男ローランド＝アウスバッハです。ロランって呼んでください。これから皆さん仲良くしてくださいね。好きな食べ物は…」

その他に好きな食べ物、嫌いな食べ物を無難にいっておくことにする。

母上鼻から鼻血が…。うん、見なかったことにしよう。

この後も数人続いて自己紹介は終了した。

どうやら今日はこの後、注意事項やこれからの事などの説明を受け終了みたいだ。

一週間後は王都近隣の森へオリエンテーションらしい。遠足だね、懐かしい。

今日はヘンリー爺ちゃんかな？

今日からの修行は誰だろうと考えながら母上を待ち、帰ることになった。

―――――――――――――

―　Another　Side

あれが父上がおっしゃられていた神童か…。

帰り支度を整え父上達を待ちながら、考えごとをする。

というか嫌いな食べ物が毒料理とはなんなのだ。普通毒は食べないだろうに。

ルカやジェダはヤツをどう見たのか気になるな。

「ルカ、アウスバッハをどう見た」

「えーと、いい人そうですよね」

私が聞きたいのはそういうことではないのだが…。

「ケッ、どうでもいいぜあんな奴。俺様は後ろで鼻血を出してた女の方が気になるぜ」

「あの私達（わたくし）のお母様達とお話していた方ですか？」

「あぁ、何もんだありゃ」

そういえば父上とも話されていたな。確かに親しそうだった。
「あれはその噂の子の母親ですよ」「お母様！！」
む、父上達がやってきたようだ。今日のところはこれまでか…。
その後私達は父上達と一緒に帰ることとなった。

～ Side out ～

◆

今日からの修行はアラン爺ちゃんのようだ。
「どこからでも来るがいい」
いつもの基礎トレーニングの後、組手を行うことになった。
「今回は勝つからね、爺ちゃん」
「ふふ、頑張ることだな」
前回は筋力差を考慮して相手を疲れさせ動きを鈍くしようと長期戦を選んだんだけど、
そこはヘンリー爺ちゃんで慣れまくってた爺ちゃんに見事に完敗し

た。
なので今日は短期決戦で全力勝負だ！！

・　・　・

うん、リーチの差は大きいと思う。前回よりは全然良かったが、筋力差とリーチの差は強烈だ。
手数やスピードを利用しある程度闘えたが、まだ純粋な格闘戦では爺ちゃんには勝てないようだ。

「よし、今日はこれまでだ」
「あ、ありがとうございました」
疲れた。爺ちゃんにもいつか勝つ。次は作戦か何か考えようか。
「あぁ、（本当に強くなったな…。つい本気で相手してしまったぞ。）着替えて食事にするぞ」

「爺ちゃん今日の食事は何？」
「さぁな、ミューズにでも聞いてくれ」

爺ちゃんは知らないようだ。ていうか今日は母上が作ってるのか？たまに母上作るんだよね。
コックの仕事を奪う感じで。たまに出てくる毒料理は嫌だなぁ…。
不味いったらありゃしない。

「坊ちゃまタオルです」「こちらはお水ですわ」
「ありがとう二人とも」
屋敷に入り、侍女のフレデリカとマリーからタオルと水を受け取る。
この二人はこの別邸に来るときに母上から自分の専属侍女として連

れてこられた。
この二人で良かったよ。侍女達の中でも優秀らしいし、優しいし、なにより美人だ。
汗を拭きながら二人と談笑し夕飯まで過ごした。

◇

あれから数日たった。明後日がオリエンテーションのようだ。
最近ジェダが喧嘩をしたようだ。
相手はワール＝イジーってやつだった。1対1だったので、感知はしたがスルーした。
力の誇示といった感じかな？　こどもだねぇ。
後、イージスから観察されている気がする。
なんかしたかな？　話しかけてくることもあるが、なにも粗相はしてないしな。

ま、気にしてもしょうがないや。

キャロルは相変わらずかな。てかイージスやルカにも下僕(いぬ)の勧誘してたよ。

イージス達は断っていたけど…。よくやるね。

ルカは女の子に人気かな。公爵家次男だしね。ジェダよりとっつきやすいし。

俺自身は一応一通りの人と話はしたけど、親友と呼べる人は今のとこいない。

焦って作るもんでもないしね。寂しく過ごしてるわけじゃないよ、それなりに皆と話してるし。

まぁそんな感じで数日過ごした。

◇

オリエンテーションの日をむかえた。今日は晴天で気持ちいい。ただ今森へ着いたとこだ。先生からいくつかの注意事項や話を聞いて自由行動のようだ。

あまり森の奥に行かず友達を作るといい、直訳するとこんな感じかな。
さて、どうしようかな？

「ここの森に泉があるそうですわ」
「だがあまり奥に行ってはいかんと言われただろう」
「そうですよキャロル」
「行きたいなら一人で行きやがれ」

キャロルが泉に行きたいようだ。イージス達に話しかけている。
泉ねぇ…。あ、水のマナが多いからあっちかな。道中に魔物はいない…と。
おそらく女王騎士（クイーンナイト）が掃討したんだろう。

「つまらないですわ！！…そこのあなたついてきなさい！」

はい、指名入りましたー！！

コマンド
　ついていく
　ついていかない
　身代わりを探す

久々の脳内コマンドだな。今回は変な選択肢はないな。
身代わりにするのは身代わりにされた人が可哀そうか…。
…ついていかないでなんかあっても目覚めが悪いしな…、しょうがない。

「聞こえてますの！！」
「あぁ、すみません。俺で良ければご一緒しますよ」
「殊勝な心掛けですわ。では行きますわよ」
「…集合時間までには戻ってくるようにな」
「ダメですよ二人とも！イージスも止めてくださいよ」
「ケッ、ほっとけって」

ルカの反応が普通だろうな。
まぁ、特にしたいことも無いし付き合ってやるかといった気分にもなった。

「大丈夫ですよ、グラム卿。道中魔物の気配はありませんし、泉を見れば満足もするでしょう。
なにかあれば私が守りますし」

といっても特に問題は起きないだろう。

「ローランドくん！」
「ルカ、アウスバッハに任せよう」「止めたってキャロルが納得しねぇよ」

アウスバッハか、やっぱり名前で呼んでほしいよね。

「あ、私の事はロランって呼んでください。堅苦しいのは苦手なもので」
「なら私の事もイージスでいい。敬語もやめてくれ」「ジェダでいいぜ、特別に許してやる」
「…はぁ、わかりました。
早めに戻ってきてくださいねロランくん。僕のこともルカって呼ん

でください」

敬語じゃなくなるのは助かる。身分はともかく同い年としては楽にいきたい。

ジェダの許可が出るとは思わなかったけど…。

「なにをぐずぐずしてますの！」

「んじゃ行ってくるわ」

「あぁ、キャロルを頼んだ」

イージス達に見送られ泉へ向かうことになった。

―――――――――――

「あ、泉はこっちですよ」

ほっとくと、変な方向に進みそうなので先導することにする。

「あら、わかりますの？」

「えぇ、もうすぐつきますよ」

「ふふ、中々優秀ですわね。あなた私（わたくし）の下僕（いぬ）におなりなさい」

うん、それは嫌です。

「申し訳ありません。これでも侯爵家嫡男ですので、お受けするわけにはいきません」

「あら、残念ですわ。あなたお名前は？」

「ローランド＝アウスバッハと申します。ロランとお呼びください」

「そう、ロランね、あなたに私(わたくし)の名前を呼ぶことを許可しますわ。気が変わったらいつでもいらっしゃい。歓迎いたしますわ」

気に入られたのか？これは。

・　・　・

「この泉ですね」

無事最短距離で到着した。

「噂通り綺麗な泉ですわね」

コマンド

あなたの方が何倍も綺麗ですよ

あなたの瞳に乾杯！！

満足したら帰るぞ雌豚

いやいや例えギャルゲーにしても選択肢おかしいから。何考えてんだ俺…。

でも、確かに透明度が高く綺麗な泉だ。

「水浴びでもしようかしら」

なんですと！！　水浴び＝裸ですか！！

いやまて、そんなことはしてる時間はないと思うぞ。

「そんな時間はありませんよキャロルさん、って…！！！」

やべ、魔物らしきマナが近づいてきてる。上か！！

「伏せてキャロル」
「グギャアーッ！」
上から現れた魔物に全力の蹴りを放ち、キャロルを抱きかかえ距離を取る。
「な、なんですのあの魔物は」
「ガーゴイルと呼ばれる魔物ですね。危ないので離れていてください」

●　ガーゴイル
　皮膚は硬い鉱石並の強度を持ち、普通の剣では小さな傷はつけられても致命傷は与えられない。
角を2本持ち、肉食で翼竜のような魔物。集団で獲物を襲うこともある。
長く生きた個体ほど硬く強靭な皮膚を持つ。

「どうする気ですの」
「あれは飛べるみたいですし、一体ですので倒してしまおうかと」
「た、倒すってあなた…」
「ま、とりあえず離れていてくださいね。アクアセイバー！！」

　学校には護身用のミスリルダガーは持ってきてなかったので、水のマナから剣を2つ作ることにする。

「ギャアアーッ！！」
　こちらに向かって勢いよく飛びかかってくるガーゴイル
「クロスブレイク！！」
　その勢いを利用し斜め十字に切りつける。

「ギィアアーッ！！」
うん、ほかの魔物より随分硬いな…。ギガースフロッグとかなら楽に切り裂けるんだけど、これ。
中々タフだ。だったら…
「アイシクルクロス！！」
アイシクルセイバーでクロスブレイクを放つ。
アクアセイバーでこれをやると氷の剣になるんだよね。ガーゴイルもバキバキに凍ったよ。
血の匂いで他の魔物が寄ってきても面倒だし、このまま放置かな。
「さ、そろそろ時間ですし帰りましょうか」
「え、えぇ。わかりましたわ」

キャロルを連れて、何とか時間までに戻ることができた。一安心ってとこかな。

―――――――――――――――

― キャロル Side

（な、なんでしたの…今のは）

私(わたくし)はあまりにもあっさり魔物を倒した彼を見ながら、集合場所まで歩いている。

(私(わたくし)、彼に助けられましたの？さっきの水の剣はいったいなんなのですの…？
魔物を全く寄せ付けないほど強いなんて…。)

様々なことを考える。

(お父様以外の異性に抱かれてしまいましたわ。…たくましい腕の中でしたわね。)

はっ、何を考えているのかしら私(わたくし)は！！

…ともかく、彼は私を助けた。これは事実ですわね。

やはり、私のモノにしたいですわ。容姿も悪くありませんし、教養もありそうですわ。

(何とかならないものかしら？これだけほしいと思ったのは初めてですわ…)

私(わたくし)はそんなことを考えながらじっと彼を見つめて歩いていた…。

t　〜

〜　Ｓｉｄｅ　ｏｕ

第七話へと続く

〜　はっ、ロランちゃんに悪い虫が！！き、気のせいよね〜　〜

第六話　出会いと芽生え（後書き）

ワール＝イジーが大勢でジェダと喧嘩するのはまた別のお話。
その後、メルー＝イジー登場と…。
今回は公爵家連中と顔見知りになる回と考えていただければ…。
祖父との戦闘は省略…。
毎度お待たせして申し訳ないです。なにぶん時間が取れないもので
して。
批判される方や受け入れられない人はリターンを。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1493y/

女王騎士物語の世界で生きる

2011年11月24日15時37分発行